

# ★石材店さんに聞く



越知町横倉山の麓から3年前に加茂の地へ移転された、横倉石材の岡林増樹社長にお話を聞いてきました。

今回は供養の話とお墓の話をついにまとめて2ページでお伝えします。

近年、都市部では葬儀を営まずに直接火葬場で遺体を荼毘に付す直葬の割合が、火葬全体の25%にまでおよぶというデータがでています。それに伴って、お墓を「ただお金がかかるだけの形式に過ぎない」とまで割り切ってしまう方も増えてきています。

少子化や経済的な背景に裏打ちされて、弔いの多様化は認められて当然なのですが、中には薄利多売に弔いを切り売りするかのような安直な風潮があることも事実です。この機会に今一度お墓について考え、弔いの選択肢をさらに豊かなものにしていただければ幸いです。

『ポツンと一軒家』というテレビ番組が好きで、そこに登場する家族の皆さんは一体どんなお祀りをされてるんやろう？っていつも考えるがです。素朴でささやかだとしても、ご先祖様に対してないがしろにせず、きっと温かい気持ちで接してるんじゃないだろうかって思うがです。現在は散骨などの簡素化が進んでいますが、お弔いは合理化とはまた別の違うものじゃないでしょうか？

そもそも、『埋葬』そのものの歴史は、ネアンデルタール人まで遡ると言われてるんですが、彼らは近親者を埋葬する時に、すぐ近くのお花では無くて8kmぐらい離れた所のいろんな種類のお花を死者の傍らに供えたそうなんです。それはつまり死者を大切なものとして敬っていたということで、なぜ大切にしたいかという、そこには原始の物々交換が根底にあって、死者を黄泉の世界に丁重に送ることで、その交換として彼らのもとには新しい命がまた生まれると考えられていた。当時の人々にとって一番嬉しい出来事は新しい人間の生命が誕生することで、言い換えれば、彼らの心の中では生と死が同じ環で繋がっていたがやないろうか思います。

現代は便利になった反面、死を間近にする機会が減ってきたと思うんですが、やっぱり死を意識することが生をより豊かにすることにもなると思うがです。前向きに死を意識するのは、やっぱり供養の気持ちだと思います。そして、その気持ちが向かう対象が、日常の営みの中で何かと波風の立つ自分の心の外側に確固として、いつも変わらず在って安心を与えてくれるもの、それがお墓じゃないかなと思うがです。

今の日本人に馴染み深い一般的なお墓の形式は、卒塔婆の語源でもあるインドのストゥーパストゥーパに由来するそうです。積み上げられた墓石の一番上の石を竿石サウジと呼びますが、これがもともとはお骨の代用だったそうです。一度納骨してしまえばお骨を見ることができなかつたので、竿石をお骨に見立てて拝み、また屋内では木の位牌を同じく遺骨の代わりとして拝んだそうです。

その風習が仏教と共に日本にも伝わり、やがて民俗学者の柳田國男氏の言う「人はなくなったら33年～50年かけて自分の個性を捨てて氏神になる。」という考え方が各地で広まっていったようですね。神道の考え方の荒魂アラミタマとして死者を恐れる側面もあったようですが、一方では死者を毛嫌いせず集落内の生活の場に墓地を設けていた三内丸山遺跡のような例もあるようですね。(石材の話に続く ↗)



ご自身が手ノミで彫られた庵治石の古代五輪塔



越知町での時代を支えた44インチのダイヤモンドカッター



段階を変えて使うたくさんの研磨版